

一九世紀近世節用集における大型化傾向

佐藤 貴裕

はじめに

一九世紀の近世節用集^(注1)には、早引節用集の流布と伝統的な節用集の大型化という二極化傾向が認められる(佐藤一九九〇a、一九九六a)。前者は、明治期において節用集が早引節用集一辺倒になることへの確かな動きと捉えられる。その反面として伝統的な節用集は消えていくことになるが、一九世紀・幕末までに最後の展開を見せる。それが辞書本文・付録の大幅な増補による大型化であり、おそらくは明治期において教養全書への転身をもたらすことになる重要な変化である。してみれば近世節用集の一九世紀は、まさに新旧交代の重要な時期であったと考えられる。ただ、その様相の細部にはこれまであまり触れてこず、二極化といっても刊本の状況から知るだけのことであった。本稿では、これまで特に位置づけてこなかった事象や刊行に至らなかった事例にも触れ、大型化傾向の様相を的確に記述する端緒としたいと思う。

一 概 観

まず簡略ながら一九世紀の近世節用集の状況をおさえておこう。佐藤(一九九六b)によれば一九世紀に開版

された近世節用集は一七八本だが、語彙集型往來と見るべきものや調査不十分なものを除くと一六八本となる。これについて検索法の分布をみると、天保の改革までは古本節用集以来の部門（イロハ・意義）分類が六割強を占めたが、改革以降では早引（イロハ・仮名数）が七割近くを占めており、逆転したことが知られる。判型別では、改革以前でも美濃判半切（B六相当）以下のものが六割を超えていたが、改革以降では八割にも達する。単純に数だけとれば、一九世紀は小型本の時代ともいえることになる。

検索法		部門	合類	早引	ほか	合計
改革前	五	六	二	二	六	九〇
改革後	一	九	四	五	三	七八
合計	七	五	六	七	九	一六八

判型別		美濃	半紙	半切	三切以下	合計
改革前	二	五	三	三〇	三〇	九〇
改革後	八	八	三	三三	二九	七八
合計	三	一	六	六三	五九	一六八

このような状況になったのは、やはり小型であった早引節用集に由来するのであろう。小型本は、一八世紀前半には一割強にすぎなかったが、後半には全体の五割にまで飛躍して右下表の状況につながる。この一八世紀後半に早引節用集が登場するのだが、触発されて新たな検索法を採用した節用集もほとんどが小型本であった。また、早引節用集は辞書に徹するかのようにつ録類を削減したが（佐藤一九九四）、これも後続諸本は倣っていく。結局、早引節用集は、検索法だけでなく判型や構成も含めた新しい典型を確立したのである。典型となれば伝統的なイロハ・意義分類の節用集にも倣うものが現れ、ついに小型化傾向が現出するのである。

これに対抗するかのようには、伝統的な節用集——イロハ・意義分類の本文に、多様な絵入り教養付録を配する美濃判縦本——のなかには、付録・本文を大幅に増補するものが現れた。具体的には次に掲げる諸本である。いま、書名ごとに刊年別に示し、諸版の下に丁数（巻頭付録・辞書本文・巻末付録）・書肆数（大坂・京都

・江戸）^(注2)・所蔵者を示す。

都会節用百家通（以下『都会節用』）

寛政一三年	丁数・巻頭四七	本文二九九	巻末六	書肆・大坂五	京都〇	江戸〇	架蔵
文化八年	四七	二九九	一二	五	〇	〇	亀田文庫
文政二年	四七	二九九	一二	四	〇	一	架蔵
天保七年	四七	二九九	一二	四	〇	〇	架蔵

倭節用集悉改大全（文政元年版は『倭節用集悉改囊』。以下『倭節用』）

文政元年	四一	二六一	二	二	八	一	架蔵
文政九年	四一	二六一	二	二	六	一	架蔵
同別版	七一	二六一	二	六	一	一	謙堂文庫

大日本永代節用無尽蔵（天保二年版は『永代節用無尽蔵』。以下『永代節用』）

天保二年	一〇〇	三〇五	一五	〇	一〇	一	架蔵
嘉永二年	一一一	三〇五	一六	〇	一〇	一	架蔵
文久四年	一一二	三〇五	一六	〇	一〇	一	架蔵
江戸大節用海内蔵（以下『江戸大』）							

文久三年	一七七	二五〇	一八	〇	〇	六	架蔵 ^(注3)
------	-----	-----	----	---	---	---	--------------------

総丁数で三〇〇丁を超えて四〇〇丁に達するものもあり、語数も三万語を超えるようになる。それにつれて二、三冊に製本されることも普通になっていく。版数上は右のように僅か一一本に過ぎないが、その影響は意外にも広範囲に及ぶようである。以下、その様をいくつかの面から見、一九世紀を大型本の時代としても捉えられる

ことを示しつつ、その実相の一端に触れようと思う。

二 傾向としての大型化

まず、わずか一一本に過ぎない一群をもつて傾向と見ることに一言しなければならぬ。

一一本とは、刊記上の刊年別で数えた数字だが、これより増える可能性もないではない。たとえば横山俊夫（二九九〇）は『永代節用』文政一三年版を報告するが、それまで初版は天保二年版とされたのであった。この伝でいけば、寛政一三年版を初版とする『都会節用』が『国書総目録』で寛政八年刊と記載されるのが気になってくる。『江戸大』でも、刊記は文久三年の一種だけだが、乾巻の年代記の最新年に元治元年・同二年・慶応元年・明治三年等のバリエーションがある。^(注4) これなども一種の版数表示と見てよいのかもしれない。また、刊行寸前まで行ったものも含められようか。大坂本屋仲間記録によれば文久元年から二年に『都会節用』の再版準備がなされていたし、これとの関係は不明ながら、関西大学図書館には厚冊の稿本が蔵されており、書名は記されないものの、元治年間の記事が認められるという（米谷隆史氏御教示）。

このように増える可能性はあるにしても二〇本程度までのようである。そこでやはり、数は少なくとも一一本が大部であることに注目しよう。まず考えねばならないのは経費のことで、一書刊行されるごとに深刻な問題があつたことは次の逸話からも明らかである。

一之を聞く高井蘭山の江戸大節用を編輯するや、其宝永元年の元版に就き、天保四年より文久三年まで三十余年を経て始めて成り、其間書肆の之が為に産を傾むけたるもの数家なりしと、其の巻帙の大に、資料の多き、勢ひ然らざるを得ざるなり（『明治節用大全』明治二十七年刊、「例言」）

このような逸話が明治維新を越えてすら語り継がれたのだから余程のことなのであろう。あるいはお話として

誇張されてもいようが、似たようなリスクは他の大型本も抱えていたはずである。そうしたリスクをおしての刊行であれば、一一本の存在が事件であり、また十分の重みを持つものと考えてよいのではないだろうか。

さらに大型本の持ちえた、一種独特の存在感についても触れなければならない。

すなわちこの書（付録が豊富に付く節用集。佐藤注は、それに従う者には、礼になつてゐるという意味での正統意識や安心をもたらずと同時に、とくに文の道における一層高度な礼法の存在をも意識させ、それを習得すれば「上品」の世界に近づくとの感覚を与えうる性格を兼ねそなえていたことが重要である。しかも「上品」なる人界は、とぎれることなく神仙界に通じていた点も見のがせない。それゆえ、逆に節用集に従わぬことは、タブーを犯したばあいに覚悟しなくてはならないような宗教的苦痛を、時として感じさせたと見てよい。これはたとえば、（中略）大冊本節用集がそれぞれの所蔵家でしばしば「門外不出」や「他家貸出無用」の扱いを受け（京都府下での聞き取り）、さらには、墓石と並ぶほど重要なものと考えられたばあひがあること（福島県下での聞き取り）からも、推定されるところである。（横山一九九〇）

辞書にのみ徹しようとした早引節用集には到底成しうところではなく、日常生活の指針ともなった大雑書風の付録をはじめ、様々な記事を結集したがゆえの豊かさが次元の異なる存在価値を生み出したのであろう。近世節用集を記述的に研究するとき、こうした特異な存在は十分注目すべきものである。またそうした存在を生み出した当時の節用集界についても理解を深めたく思うのである。

三 形式的な大型化

人間の心理に食い込むほどの存在価値のあることを直観的に悟らせるのに、大冊であることは効果があつたろう。上背のある人に気押されたり、大きい自動車ほど高級だと見てしまったりなど、大きいことからくる心理的

な影響は、我々も日常的に経験するところである。このため、内容の充実はさておき、形だけ厚手に仕立てた節用集も現れることになった。大きさが内容の充実を保証するかのよう記号化するのである。あるいは記号化が成立するほどに大型本の存在が認められたとすべきだろうか。

『国宝節用集』文化七（二八一〇）年刊

架蔵する本書は、美濃判縦本で厚さが七五ミリほどあつて『都会節用』以降の大型本に見紛うばかりである。これは、全体で二三〇丁ほどにすぎないのを、袋綴じの内側に一葉の間紙を挿入してのことである。単純な嵩上げとも見られるが、印字の透過を防いでもいるので、相応に実用的な工夫だったのかもしれない。

本書の構成は、巻頭から順番に記せば次のようである。

- A 巻頭付録一（丁付け口の二〇口の三七、^{（注5）}
- B 巻頭付録二（同二十五〇六十四、頭書入り往来物。一丁のみ「宝曆通宝」との柱題あり）
- C 辞書本文（同二〇百三十四、「国宝節用集」）
- D 巻末付録（同二〇八、「千字文国字引丁付合文」。同二〇十八、「四体千字文国字引」）
- E 広告（五丁分）

各部を丁寧に見ていこう。まず、Aの末丁裏に「門部の註」があるので、本来はCの辞書本文が直結するであろう。そのCの末丁裏に「名乗字」の水・火・木・金・土性は飛んで奥付けの丁に記される。結局、A・Cに奥付を添えたのが本来の姿なのだろう。残るB・Dはそれぞれ単独に刊行されたか、他の節用集の付録でもあろうが、間に合わせのように合冊されたのである。こうした構成は、少なくともA・B・Cについては本書の前身『万徳節用集』（天明二一七八二〇年頃刊。亀田文庫本）も採るところなので、一九世紀の現象としてのみ

見るのは控えた方がよさそうではある。

ただ、近世節用集ではままただ右のような不体裁が文化七年の再版時に手当てされないのは、購買者にとっては面白くなかっただろう。また、ほかにも不体裁な部分がある。表紙見返しに「万徳引丁附合文」とあるのは前身『万徳節用集』をひきずるものだし、頭書付録の「改正年代記」も最新記事は天明二年のものであり、巻頭の武鑑も「天明改正御武鑑」と旧題を引きずり、内容も改められていないのである。

逆に前身の『万徳節用集』をひきずるからこそ、検索法には一定の評価が与えられる。まず第一検索のイロハ分類では発音を優先することがある。たとえば、普通ならヂ・ジではじまる語はそれぞれチ部・シ部に配するが、本書では別に設けた「ヘヂ」部に一括するのである。巻頭の「丁附合文」（目次）もそうした特殊な構成を的確に反映して周到である。第二検索は語末仮名の清濁引撥の別で四分する工夫がある。第三検索は意義分類だが、六門に抑えられ、門名も「てんち・人のい・どうぐいふく・草木くいもの・いきもの・ことば」と和らげられている。三重三種の検索法の煩雑さは気になるものの、配慮のあることだけは評価できるのである。

『万海節用字福蔵』文化末年ごろ刊か

本書も架蔵の合冊体だが、初・末数葉が欠けるので正確な刊年は知られない。構成は、巻頭付録三〇丁、辞書本文の『万海節用字福蔵』（以下『万海』）六四丁、『明光大雜書千種曆』八一丁、往来物四五丁（題名不詳。末尾数丁欠）からなる。『万海』の単独刊行に米谷隆史氏蔵文化九年求版本があり、『明光大雜書千種曆』では国会図書館新城文庫蔵文化一三年版があるので、この合冊体『万海』も文化末年ごろか、それ以降の刊行であろう。なお、総丁数は二二〇丁ほどだが、各丁内に二つ折りの間紙があるため、厚さは八〇ミリほどにもなる。

本体の『万海』辞書本文は『四海節用錦繡囊』（享保一九年版・寛延四年版。以下『四海』）と内容だが、匡郭

の切れからすると、『万海』と享保版が同版で、年次的に近い寛延版は無関係である。したがって、『四海』享保版の「日本国并郡御武家」は「享保癸丑歳（一一八）改」とある当時のものだが、同版の『万海』もそのまま踏襲することになった。^(注9)幕府要職などはしばしば交替するので埋木して修訂することが少なくないが、そうした手当てもなされない。同趣の不体裁は『国宝節用集』にもあったが、『万海』のは一〇〇年近くも前の内容なのでから度が過ぎる。付録に期待した購買者は面白くないどころではなかったろう。

かなりの杜撰さであって、これにくらべれば『国宝節用集』などは良心的ですらある。本書のように空疎な形でも刊行できたところに、当時の大型化の様相が過熱気味だったことがよく知られるのである。

『雅俗幼学新書』文政一〇（二八二七）年稿成、安政二（二八五五）年刊

本書は、独自に編集されたものとか、『雑字類編』の類などと言われることがある。たしかに、楷書のみを示や、用字直下への片仮名付訓などは、あまり見慣れたものではない。どちらかといえば漢詩文作法書や唐話辞書に近いスタイルでもあり、節用集と関係があるとは思いつきにくいようである。が、本文上は、まず『倭節用』との関係を明らかにすべきものである。^(注10)こころみにア部時候門を比較しよう。まず、『倭節用』の各見出しに通し番号を付して示す。付訓は省略し、同字符は本来の字にもどした。

1 暖	2 暑	3 溽暑	4 新春	5 献春	6 改年	7 新年	8 献歳	9 明年	10 翌年	11 翌日	12 明日	13 明
夜	14 明晩	15 明年	16 明朝	17 明旦	18 詰旦	19 明後日	20 明外日	21 朝	22 旦	23 晨	24 朝夕	25 旦夕
26 朝晩	27 晨昏	28 朝朗	29 朝開	30 朝明	31 朝間	32 朝未明	33 朝和	34 朝陰	35 朝魚夕菜	36 早朝	37	
早旦	38 毎朝	39 毎旦	40 五更	41 明暮	42 早晩	43 夙夜	44 昧爽	45 黎明	46 平明	47 曙	48 未明	49 曉
50 曉鐘	51 晨鐘	52 報曉	53 侵曉	54 前月	55 去月	56 秋	57 秋	58 穉	59 爽節	60 金商	61 秋天	62 秋景

63 秋夜	64 暗夜	65 一日	66 一時	67 晨朝	68 朝疾	69 弘曉	70 白馬節会	71 踏歌	72 踏青	73 浅草祭	74
葵祭	75 菖蒲節供	76 艾節	77 蒲節	78 熱田祭	79 愛宕千日詣	80 粟田祭					

この通し番号を流用して『雅俗幼学新書』（以下『雅俗』）のア部時候門を示せば次のよう。

改春	4	7	6	9	10	明月	12	11	後日	翌夜	翌晩	来晩	翌午	翌朝	翌旦	18	19	54	55	65	66	41	46	曉更	
曉籌	47	51	晨鼓	曉鼓	朝鼓	40	21	23	早晏	昏旦	26	28	朝間	33	24	25	32	36	39	68	69	64	1	3	56
58	秋暑	61	62	秋暮	秋夕	63	70	71	75	78															

語順の異同からは無関係のようだが、『倭節用』において隣接する語は『雅俗』でも比較的近い位置にあるように見える。また、三語程度の連続も多く、五語六語の連続もある。ことに41〜46・47〜51は、41〜51の一一語の連続中に独自語二語が介入したと見れば、関係の深さをうかがわせるものといえよう。

『雅俗』の七五語のうち二〇語が独自語になるが、語素〈翌〉を用いるものなど、『倭節用』の各見出しから語素を切りだして組みかえたようなものが目立つ。「晨鼓・曉鼓・朝鼓」は比較的独持だが、これも朝の意の語素を取りかえたかのようなだし、〈鼓〉も直前の「50 曉鐘 51 晨鐘」にヒントを得たのかもしれない。

このように『雅俗』は、多くを『倭節用』に依存するように見える。安易といえは言い過ぎかもしれないが、原拠によりかきながら、多少体裁を改めて手軽に別書を構成したというに近い。ただ、半紙判で厚さも40ミリ強程度なので、『万海』のように外形で欺いていない分、罪は軽いのかもしれない。

四 未刊の諸本

刊行された節用集が表なら、ここでは裏を見ることになる。とはいえ無名人によるものではなく、むしろ有名な人としてよいであろう高井蘭山（一七六二〜一八三八）と大蔵永常（一七六八〜一八五七）の例である。蘭山は、

読本『星月夜頭晦録』をはじめ、往来物・女訓書など通俗啓蒙書の版本があり、農学者として名高い永常にも農書『広益国産考』ほか二七部六九冊もの版本がある（日本大百科全書）。こうした学識と経験を有する彼らすら、

大型本節用集については稿本・企画のままで終わらなければならなかったのだが、そうした例をみることで、近世節用集における一九世紀の意味を考える一助になればと思う。

蘭山「字貫節用」^(注11) 文化元（一八〇四）年序

稿本として国会図書館に蔵される本書は次のように紹介されるものである。

一〇冊、全五七〇丁。大きさ二四・二×一六・九cm。文化元年（一八〇四）序。序および凡例を記した第一〇七丁は「書林合刻」の銘入野紙を用いる。（中略）約三万九千にのぼる見出し語を、意味によって一六門に分類し、さらに読み仮名のイロハ順で四七部に細分する。（中略）見出し語の多くには、その意味・用法等を説明する注が添えられている。これは、同様の形式をとる『和漢音釈書言字考節用集』等の影響を受けたものと思われ、単なる字引ではなく、百科事典的な性格を指向したのであろう。（小坂昌二〇〇二）三年前に刊行された『都会節用』に触発されたのか、当時の節用集としては破格の規模である。内容も異例で、語注の多さも目を引くが、『五百羅漢』に全員の名を示すなど徹したものとなっている。こうした語注の重視には、蘭山独自の早引節用集批判があつたようである。本書の序には次のようにある。

近世早引節用集行レ、門部ヲ別タズ仮名ノ数ニ依テ字ヲ求ム。世俗珍重シテ便利ト思ヘリ。按ズルニ世ノ人ヲ愚ニスルコトコトニ多シ。某字ハ何ニ属スベキ字ナルヲ取失コト是ヨリ始ル

意義分類を廃した早引節用集が流布したために、その字（で表される語）の意味分野が見失われたという。版權や販売実績などの実利的な側面ではないところで早引節用集を批判するのは見識を感じさせる。また、その弊

を正すために『字貫節用』の検索法に意義分類を採りいれ、語注も多く、かつ詳しくしたものと思われる（佐藤一九九四）。が、それだけに大規模なものになるので、このままの形では刊行されなかったであろう。

永常『早々引』（仮称）

永常の節用集は、早川孝太郎（一九四三）に収められた一連の河内屋記一兵衛宛書簡に現れる。まず、京都の丸屋に持ちかけた節用集見本があるが、過去の逸話として記されるので正確な時期は分からない。ただ、次項で扱う稿本の原本でもあるらしいので、そう遠くない過去のもののなのかもしれない。

丸善殿持株には有之間敷候得共、御仲間之持株に而可有候合類節用を致増字、拙子かなつかひ之通二字目かな引に致し候得ハ早々引と相成候を、初冊乾坤之巻之いの字之分を認、御掛合可被下与相頼遣し候処、一向一度の返事□（もカ）無之候^(注12)（天保一四年一月一三日付）^(注13)

「合類節用」は、延宝八（一六八〇）年の初版しか知られない『合類節用集』ではなく、幕末まで再版され、「増補合類大節用集」とも称した『書言字考』であろう。これに増補し、さらにイロハ二重検索にする予定だという。効率のよい検索法を志向するのが印象的で、蘭山と好対照である。ただ、「乾坤之巻之いの字之分」とあるように「書言字考」と同様、意義分類を先に立て、その内部をイロハ二重検索にするのであろう。

本書は、丸屋の関心を引くにはいたらなかった。大規模ゆえに経費回収の見通しが立てにくかったろうし、『都会節用』『倭節用』、時期によっては『永代節用』などの先行諸書を押しのけるだけの特徴・魅力がないと判断されたのかもしれない。また検索法も版權（板株）の問題があつて簡単には事を運びにくくもあつたらう（佐藤一九九〇b）。結局、永常は本書を基としたらしい別本を河内屋記一兵衛に託すことになるのである。

永常『大々全大早引』（仮称）

合類節用ハ増字を致し十三門もどしスミシ也。此度柏与の早引仕直し候様、引方一二三言をわけ、かなを数致し候ハ、大々全大早引とも云様可相成候。尤出所ハ元の如く付申候。京都板元へ早々御懸合之上合類老部御遣し可被下候（天保一三年九月二十九日付）

『書言字考』に増補したものを「十三門もどし」たというが、これは『書言字考』の意義・イロハ分類を、より一般的なイロハ・意義分類に直したというのであろう。さらに早引節用集のように仮名数で配置しなおす予定だという。有用で分かりやすいものをめざす永常の着眼は現実的的確である。なお「出所」とは用字の出典のことだろうから、学問性も相応に確保する意欲的な計画のようである。「京都板元へ早々御懸合」は『書言字考』の版元への版權上の配慮であり、これまた現実的な対処である。

このように『大々全大早引』の編集作業は、刊行を前提にした極めて実際的な作業であった。この点、蘭山の『字貫節用』が理想をつらぬくあまり、現実から遊離しがちであったのとは対照的である。しかし、永常に『大々全大早引』の刊行を断念させたのは、ほかならぬ蘭山の節用集だったのである。

蘭山の一本

一合類の義忝奉存候。右は江戸の蘭山先生増字致し候由に相聞へ申候。左候へハ其上拙子が中々難及義に御座候。併し、学者の致し候者、俗人者難見合御座候。右節用はいろはわけには候へとも、一言二言にわけ無之候間、甚見にく、御座候。早く引け候様致し候へハ、日本一の字引に相成可申候（天保一四年二月五日）

河内屋から稿本の写しを見せられたのか、いさぎよく手を引こうという。一方では、蘭山を「学者」と遇しつ

つも、検索法への配慮が欠けるのを遠慮なく批判していて興味深い。その背景には「俗人者難見合御座候」とあるように、利用者の使い勝手を最優先しようとする実学的な風があるように思える。

実際、蘭山にも深慮はあるのだが、やはり現実から離れがちである。先の『字貫節用』もそうで、その語の意味分野を明示するのに意義分類を採用したのだから、語義は語注で示せるのだから検索法に依存しなくともよいはずである。これは現代の国語辞典を基にいうのではない。『字貫節用』の序と同じ年に刊行された『長半仮名引節用集』では、検索法は変則の仮名数引きながら、漢字一字で各語の意味分野を注しているのである。新しい検索法を受けいれつつ、残すべきは残すといった柔軟性が蘭山には認めにくいのである（佐藤一九九四）。

ところで、永常の見たのはどのような節用集なのだろうか。仮名数は採用しないので従来のイロハ・意義分類か、『書言字考』のような意義・イロハ分類なのだろうか。見出し語数では『書言字考』だけで三二五〇八語なので（高梨信博一九八〇）それ以上の語数なのだろう。とすると『字貫節用』なら十分にこの候補になる。ただ、成稿時期が序にある文化元年なら、天保一四年までに四〇年の開きがあるので別の成稿があったとも考えられる。あるいは、蘭山の増補した『江戸大』の刊記に「天保四癸巳年増補」とあり、彼の没年が天保九年であることを考えれば、永常が見たのは『江戸大』か、それに直結する稿本だったのかもしれない。

浜松藩家中某の一本

三年後、永常は、当時仕えていた浜松藩家中某の大冊節用集の計画を河内屋に知らせた。

一当家中に

一合類節用集 / 一大全早引 / 一文藻行潦 / 一文語解 / 一書言俗解 / 一名物六帖
其外右等を原本と致し出所を入、日本一之字引を拵度申人有之候。余り大冊に相成候故、彫候人も買候人

も有間敷敷に奉存候。如何に可有之哉、御考可被下候（弘化二年四月九日付。「」は改行）
永常自身は大型本を断念したものの、他人の企画を河内屋に知らせるだけでなく刊行の可能性まで打診するのが興味深い。普通なら見込みの薄いことを家中某に伝えて済ますところで、書肆に知らせることもないだろう。が、知らせたのは、右の企画からおして蘭山の稿本に対抗できると見たのもあるうが、彼自身、本心では大型本を諦めていなかったからなのだろう。

当の浜松藩家中某がどのような人物なのかは不明だが、永常に刊行の可能性を尋ねたのだから、相応の学力はあっても、書肆とのつながりの薄い、自著の刊行経験もない人なのだろう。そうした人でも大型本節用集の編集を企図できたのがこの時代の雰囲気でもあろう。もちろん、資料となる辞書類も豊富に出版されるという環境の整備も込めてのことである。

先にみた『雅俗幼学新書』は刊行されたけれども、編者・森楓斎は、書家・漢学者として『広益諸家人名録』『江戸現存名家一覽』に見えるものの、『雅俗幼学新書』以外に刊行された著作はないようである（国書人名辞典）。とすれば浜松藩家中某と同じような層に属するとみてよいかもしれない。節用集を刊行できたかできないかは小さい差なのかもしれない、たとえば、楓斎が江戸に住したこと、紙数を抑えたことなどの好条件が揃うかどうかの差しかないのかもしれない。ともあれ、この二人の事例は対照的なものとして注目してよいと思う。

おわりに

以上のように、形式的に大型化するような追随者を生んだこと、旺盛な編集意欲の存在したこと、特に、出版界には必ずしも近くない人々にも大型本への志向が横溢していたことが確認できた。こうしたことから、一世紀における大型化傾向が確固としたものであることを証するものと思う。

佐藤（一九九六a）で、付録充実型の大型節用集が刊行される素地は一七〇〇年前後にできあがっていたと見た。その実現は一〇〇年後の『都会節用』まで持ち越されたが、なぜその時期になったのかを考えるのは記述的研究上、大変興味深い問題である。右にも幾分触れるところがあったが、やはり早引節用集の影響を考えなければならぬ。早引節用集は一八世紀後半に検索法の開発競争を引き起こしたが、早引節用集を越えられなかった書肆たちが次に求めたのが大型化だったのであろう。このことは、開発競争のほぼ終了した時期に『都会節用』が刊行されること、さらに早引節用集に対抗して検索法を開発してきた吉文字屋が（佐藤二〇〇二）、『都会節用』の版元として名を連ねることなどからも可能性のある推測と思う。

大型化の様相の記述は、ほかならぬ早引節用集の大型化に触れないでは終わらない。皮肉めいてもいるが、対立していた節用集での現象が襲うのだから、早引節用集が節用集の代表として認知されていく過程での一齣ともあるいはすでに代表格としての位置を占めた証拠とも見られよう。本稿の範囲でも、大蔵永常が『大々全大早引』の編集や高井蘭山の一本への評価において仮名数引きに注目したあたりにも、そうした傾向をかきとることはできそうであった。また、実際に大型化した早引節用集が刊行されるにあたっては、森楓斎や浜松藩家中某のような無名の人々の活躍もあるようである。次の機会には、そうしたことも盛り込んで述べられればと思う。

注

- (1) 明治直前までの節用集を対象とするのでこう呼ぶ。一九世紀という区分は便宜的に採ったものであって他意はないが、いずれは記述的研究にふさわしい自律的な区分を設定したい。ただ、本稿でとりあげる大型本は『都会節用 百家通』を嚆矢としており、幸いにも一八〇一年の刊行である。
- (2) 三都それぞれの書肆数は、各所に所蔵される本により小異する可能性がある。
- (3) 江戸六肆は大書される。丁を改めて、さらに江都四・京都二・大阪四・尾陽一が記される。

- (4) 元治元年の架蔵書、元治二年の亀田文庫・米谷隆史蔵書等、慶応元年の同志社大学・石巻市教育委員会毛利コレクシヨン蔵書、明治三年の北島書店(長野市)・日本書房蔵書(ともに二〇〇三年一月閲覧)など。
- (5) 厚さを厳密に比較することにはあまり意味がない。料紙のわずかな厚みの差で全体の厚さも容易に異なるからである。たとえば、架蔵の『都会節用』一冊本のうち、寛政一三年本は綴元で五九ミリ、文政二年本は八二ミリ、天保七年本は四九ミリであった。以下に厚さを示すのは、あくまで目安とすることである。
- (6) 亀田文庫本は辞書本文(C)の最終丁裏以降を欠くので、DEの詳細を知ることができない。
- (7) 欠丁のある巻頭付録は、同版の(後述)『四海節用錦繡囊』初版本と同一と見て二二丁分とした。さらに「当流小謡千歳囊」・文字伝(仮称)・「救民妙方」など九丁分を合冊するので都合三〇丁とした。
- (8) ただし、柱題の「新增節用」や魚尾、柱底部の「京板」などは『万海』の段階で削られた。
- (9) 『万海』は冒頭部数葉を欠くので武鑑の名称・改年が知られないが、残存部分で確認した。
- (10) 一〇年も前のことだろうか、両書の関係に気づいて、嬉しさのあまり米谷隆史氏に電話したのも懐かしい。が、同氏は、こちらが言いも終わらぬうちに『倭節用』との関係を口にされて驚いたことであった。
- (11) 『字貫節用集』(寛政八年初版、文化三年改訂版)は書名は類似するがまったくの別書である。
- (12) 句読点や明らかな誤字を私に正すことがあり、補われた返り点も省いた。以下の引用でも同様である。
- (13) 後に言及する『大々全大早引』(仮称)が天保一三年九月二九日付け書簡に現れるので、その方が早いように見えるが、構成上の特徴や書簡の内容から『早々引』の方が先にあったことになる。注14参照。
- (14) この作業により、意義・イロハ分類の『早々引』の方が先に存したと推測される。注13参照。

参考文献

- 小坂 昌(二〇〇一)「稀本あれこれ(四〇六)『字貫節用』稿本」『国立国会図書館月報』四八七
佐藤貴裕(一九九〇a)「早引節用集の流布について」『国語語彙史の研究』一五
(一九九〇b)「近世後期節用集における引様の多様化について」『国語学』一六〇
(一九九四)「早引節用集の位置づけをめぐる諸問題」『岐阜大学国語国文学』二二
(一九九六a)「近世節用集の記述研究への視点」『国語語彙史の研究』一五
(一九九六b)「近世節用集書名変遷考」『岐阜大学教育学部研究報告・人文科学』四四―二

- (一九九九)「合類節用集」『和漢音釈書言字考節用集』における版權問題」『近代語研究』一〇
(二〇〇二)「錦囊万家節用宝」考」『岐阜大学教育学部研究報告・人文科学』五一―一
高梨信博(一九八〇)「和漢音釈書言字考節用集」の考察——註文の検討——」『国文学研究』七一
早川孝太郎(一九四三)『大蔵永常』山岡書店
山田忠雄(一九六二)『開版節用集分類目録』
横山俊夫(一九九〇)「日用百科型節用集の使用様態の計量化分析法について」『人文学報』六六
米谷隆史(二〇〇四)「高田政度の節用集をめぐる」『国文研究』四九(熊本県立大学)

〔補記〕 米谷隆史氏には、早川(一九四三)の存在を教示いただくなど、お世話になった。記して感謝申し上げる。

同は解
やうな
なと
よ。

国語語彙史の研究 二十四

平成十七年三月三十一日初版第一刷発行
(検印省略)

編者 国語語彙史研究会

発行者 廣 橋 研 三

印刷所 太 洋 社

製本所 大 光 製 本 所

発行所 蘆 和 泉 書 院

〒543-0002 大阪市天王寺区上汐五-31-18

電話 〇六-六七七一-一四六七

FAX 〇六-六七七一-一五〇八

振替 〇〇九七〇-八-一五〇四三

ISBN4-7576-0315-0 C3381